# 大津歴博だより

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

2020
No.
118

contents

特集 P1～P2 令和元年度の新収蔵品について
収蔵品紹介 P3～P6
●風水閣襖絵のうち丸子船泊図
●膳所藩士羽太家資料
●京津電車御案内
●大津町之内浜通之図

大津市歴史博物館
令和２年５月15日 発行
〒520-0037 大津市御陵町 2-2
TEL(077)521-2100
http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp/

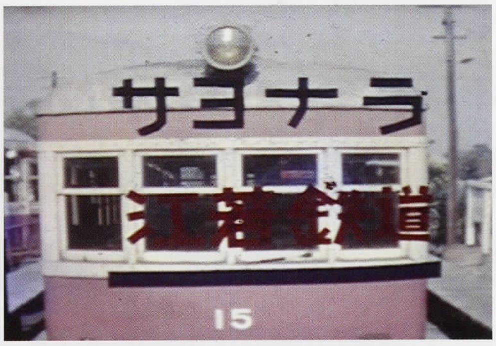
源氏乃君近江八景遊覧之図

## 特集
## 令和元年度の新収蔵品

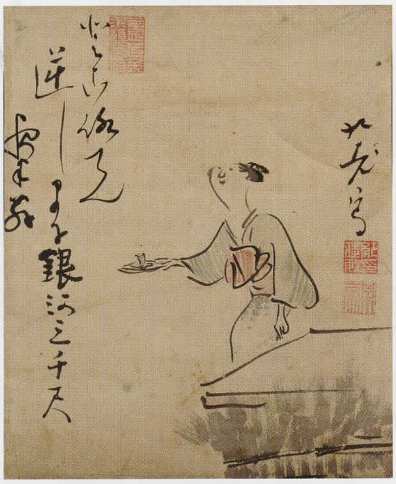
本多康稜書状

三井寺の弁慶力餅

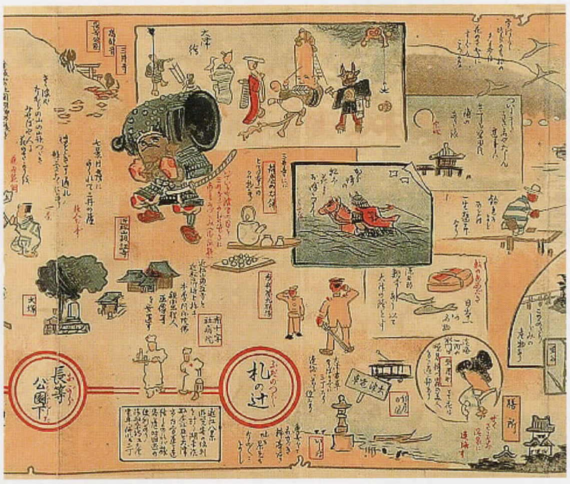
大津絵人形



『サヨナラ江若鉄道』８ミリフィルム


蕪村句「ところてん」俳画

槍持奴図


京津電車御案内

収蔵品紹介

# 令和元年度の新収蔵品について

歴史博物館では、大津や滋賀に関わる資料を購入・受贈により継続的に収集しています。令和元年度は、購入９件、受贈24件のあわせて33件もの貴重な資料が加わりました。本号では、その中からいくつかを担当学芸員によるイチオシ新収蔵品としてピックアップし、詳しく紹介します。

## ■購入資料

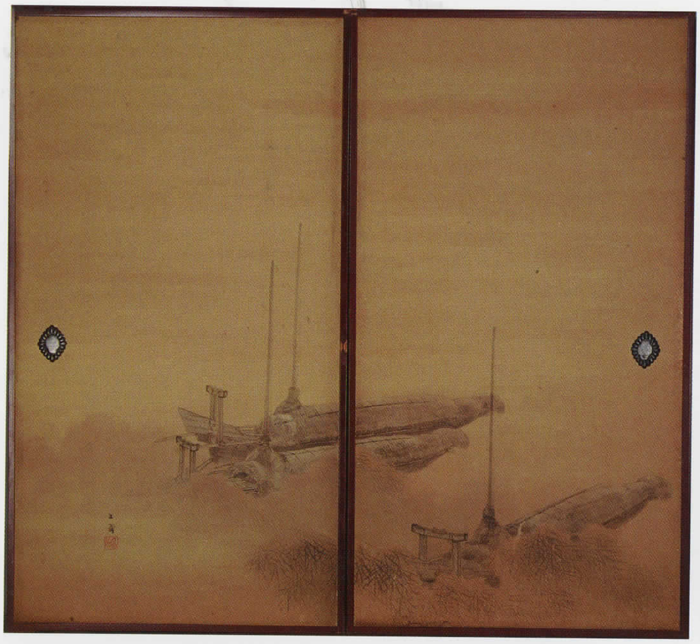
| | 展示物 | 点数 | 時代 |
|---|---|---|---|
| 1 | 大津絵　鬼の念仏 | 1幅 | 江戸時代 |
| 2 | 蕪村句「ところてん」俳画　紀楳亭筆 | 1枚 | 江戸時代 |
| 3 | 紀事・登高記他（岩垣月洲等撰） | 1冊 | 明治時代 |
| 4 | 本多康穣書状 | 1面 | 江戸時代 |
| 5 | 大津絵人形　永楽屋製 | 1組 | 昭和時代 |
| 6 | 大津町絵図写 | 1鋪 | 昭和時代 |
| 7 | 大津町之内浜通之図 | 1鋪 | 江戸時代 |
| 8 | 改定諸職往来（黒田行元著） | 1冊 | 明治時代 |
| 9 | 民法大意　上下（黒田行元著） | 2冊 | 明治時代 |

## ■受贈資料

| | 展示物 | 点数 | 時代 |
|---|---|---|---|
| 1 | 源氏乃君近江八景遊覧之図　豊原国周画 | 1組 | 江戸時代 |
| 2 | 風水閣襖絵　渡辺公観筆　附風水閣扁額　大谷句佛筆 | 23面 | 大正時代 |
| 3 | 白衣観音図　町田久成筆 | 1幅 | 明治時代 |
| 4 | 琵琶湖　琴塚英一画 | 1枚 | 昭和時代（戦前） |
| 5 | 三井寺の弁慶力餅　中沢弘光画 | 1枚 | 昭和時代（戦前） |
| 6 | 槍持奴図　柴田晩葉筆 | 1面 | 昭和時代（戦前） |
| 7 | 大津百艘船定書 | 1通 | 江戸時代 |
| 8 | 大津町中保町江遣ス一札写 | 1冊 | 江戸時代 |
| 9 | 山地猛書簡（軍事郵便）附封筒 | 1通 | 昭和時代（戦前） |
| 10 | 秋山公道旧蔵絵葉書 | 一括 | 明治～昭和時代（戦後） |
| 11 | 菓子司藤屋義重関係資料 | 一括 | 明治～平成時代 |
| 12 | 官幣大社建部神社御勅祭式典之図 | 1枚 | 明治時代 |
| 13 | 木村家資料 | 一括 | 安土桃山～明治時代 |
| 14 | 京都町奉行高札 | 1点 | 江戸時代 |
| 15 | 京津電車御案内　吉田初三郎画 | 1点 | 大正時代 |
| 16 | 京阪電車京津沿線案内 | 1点 | 昭和時代（戦前） |
| 17 | 小池正一撮影ガラス乾板 | 51点 | 大正～昭和時代（戦後） |
| 18 | 江若鉄道関係資料（駒井芳雄氏旧蔵） | 7点 | 大正～昭和時代（戦後） |
| 19 | 江若鉄道指定梅田軒　駅弁掛け紙 | 1枚 | 昭和時代（戦前） |
| 20 | 『サヨナラ江若鉄道』8ミリフィルム | 1本 | 昭和時代（戦後） |
| 21 | 山王祭等坂本関係写真およびフィルム | 一括 | 大正～昭和時代（戦後） |
| 22 | TVK-5型テレビ受信機 | 1台 | 昭和時代（戦後） |
| 23 | 膳所藩士羽太家資料 | 一括 | 江戸～明治時代 |
| 24 | 又平人形 | 一括 | 大正～昭和時代（戦前） |

収 蔵 品 紹 介

# 風水閣襖絵のうち丸子船泊（とまり）図　渡辺公観（こうかん）筆　大正９年（1920）



丸子船泊図　渡辺公観筆

千鳥図（天袋襖絵）渡辺公観筆

「風水閣」堂号扁額　大谷句佛（くぶつ）筆　大正９年

現在ではその多くが姿を消してしまいましたが、かつて、琵琶湖疏水の取水口付近には、その風光明媚な景観を求めて、数寄者の住宅や料亭、旅館などが幾棟も建設されました。湖岸には江戸時代からの松林もあり、また、洋館風の疏水設備棟の存在も加わって、取水口から湖岸一帯にかけては、趣きのある景勝地の様相を呈していました。

その一角に別邸を構えたひとりに、二代下郷伝平（久成、1872～1946）がいます。彼は、近江製糸、大阪製紙場、仁壽生命保険の社長や長浜銀行頭取など、実業界の要職を歴任したほか、政界においても、明治37年（1904）から７年間、貴族院議員に任ぜられた後、長浜町長も務めました。さらに学資基金や図書館建設など多くの社会事業にも取り組み、当時の近江政財界きっての要人といえる人物でした。

そんな彼が疏水沿いの景観を気に入って、大正年間に風流な数寄屋書院の別邸を造営しました。その建築は、眺望を考慮してか、書院の主座敷を２階に設けていました。眼下には疏水の流れと、引き水した池泉庭園、さらに視線を移せば奥に琵琶湖が眺望できるという座敷でした。

本襖絵は、まさにその眺望を引き寄せたかのように、琵琶湖畔に停泊する丸子船の情景を座敷に添えるものでした。

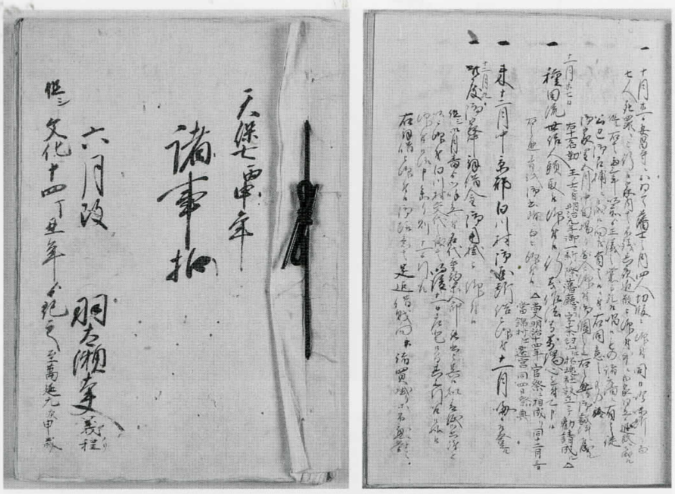
ちなみに、下郷家の先代である初代伝平及びその先代は、長浜の船年寄を務めていました。したがって、本襖絵に丸子船が描かれたのは、単に座敷からの眺めをクローズアップしたという趣向に留まらず、下郷家としての思い入れが多分にあったであろうことが想像できます。

作者の渡辺公観（1878～1938）もその点を理解していたのでしょう、ムシロの掛け方をはじめ、船上の様子が克明に描写されており、丸子船の使用実態や船容を窺う上で貴重な絵画資料といえる出来映えをみせています。なお、この座敷には、天袋と地袋の襖にも公観が絵筆を揮（ふる）っており、水の景色にちなんで千鳥が群れ飛ぶ様が描かれています。そして、座敷の次之間には水郷図、さらに奥の部屋には、漁樵問答（ぎょしょうもんどう）図、群雀図と、２階の部屋全てにわたって合計22面の襖絵を公観は揮毫（きごう）しています。実は彼は、明治40年（1907）の第１回文展をはじめ、この襖絵群を手掛けた大正９年まで計５回の文展入選を重ねていました。そのため、公観の自宅は、「近来依嘱者の其門に蝟集（いしゅう）して画を乞ふ」（『現代滋賀縣人物史』大正８年）という状況であったようで、多忙を極めていました。その最中にこの襖絵群を引き受け、しかも充実した出来栄えで応えたのでした。二代伝平も、襖絵が演出する空間に満足したとみえ、東本願寺23世大谷句佛に座敷の堂号命名を依頼（恐らく真宗大谷派長浜別院大通寺を通じた縁）、「風水閣」という、眺望と襖絵に相応しい堂号を賜りました。

（学芸員　横谷賢一郎）

## 収蔵品紹介

# 膳所藩士羽太家資料（ぜぜはんしはぶとけしりょう）　江戸時代～明治時代



羽太家資料のうち「諸事控」

2019 年の初夏のことだったと記憶しています。膳所の旧家から、ご当主がお亡くなりになり、「遺品整理をしている中で古い資料があるので、活用していただければ」という一報をご遺族の方からいただきました。

すぐにお宅の方にお伺いし、資料を拝見したところ、数はわずかですが、膳所藩の歴史を考える上で、かなり貴重な情報が含まれた古文書・歴史資料であると判断できました。

その資料を伝えてきた旧家は、羽太（はぶと）家という膳所藩内で要職を務めた藩士の家です。明治初年の『膳所藩名簿』によれば、三番組に「羽太新司」の名前が見え、奥方付、御纏奉行の役職に就いていたことがわかります。

資料群全体は、約 30 点で構成され、①文書・記録類と②器物に分けることができます。①は、羽太家の来歴書や屋敷図面も含まれ、膳所藩士の家の来歴をたどることができますが、特に注目されるのは、「諸事控」の表題をもつ２冊の記録です。天保７年（1836）～明治 39 年（1906）の間の膳所藩内の動向を知る貴重な情報を含み、藩士羽太家の備忘録として記録されたものと推測されます。幕末・明治初期の記述では、和宮下向や版籍奉還など、膳所藩の歴史を考える上で欠かせない情報も多く含まれています。

その中で特に気になるのは膳所十一烈士事件（尊王攘夷派処罰の事件）の次のような記述です（意訳で紹介します）。「（慶応元年）10 月 21 日、安昌寺で藩士のうち４人に切腹が命じられた。（さらに）同日に吟味所で７人に死罪が命じられ、家内は追放となった」。またそれに

膳所藩旗印

続けて、「この２～３年、諸藩において正義の党と称して活動するものがいて捕らえられている」と世上の様子も記録しています。さらに、後年の追筆で「右 11 名勤王の士について、明治元年御一新の際に、藩庁より字茶臼山（大津市）へ招魂社が設立されて勧請された」との烈士の名誉回復と招魂社の建立も触れています。実際に事件を見聞した藩士による記述として貴重なものといえるでしょう。

これら「諸事控」の記述は、羽太家が「奥方付」という、膳所藩主本多家の奥方の世話に関係する部局にいたということもあり、藩内でも機密情報を得やすい立場にあったためともいえるかもしれません。なお、この「諸事記」は有志団体の大津古文書研究会によって解読が進み、近いうちに共同作業として公開したいと考えています。

本多康穣（やすしげ）写真

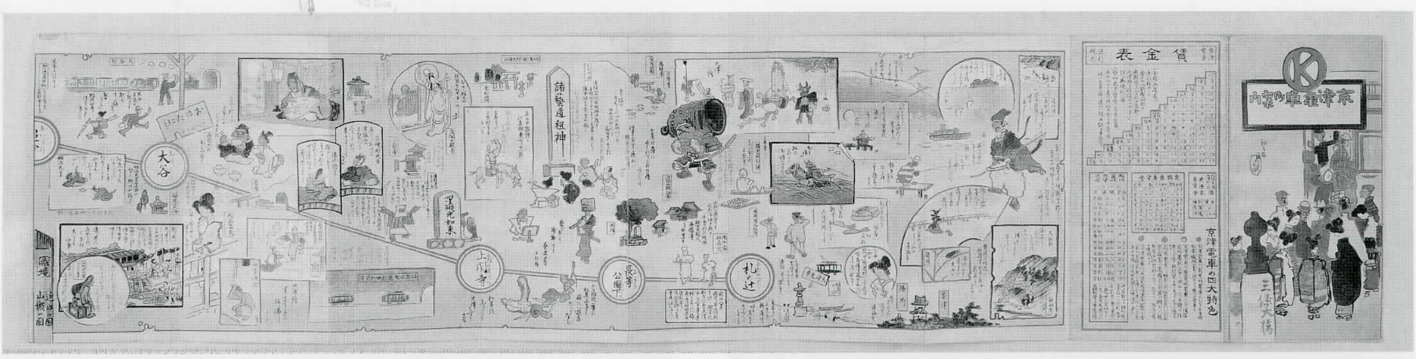
羽太新司写真

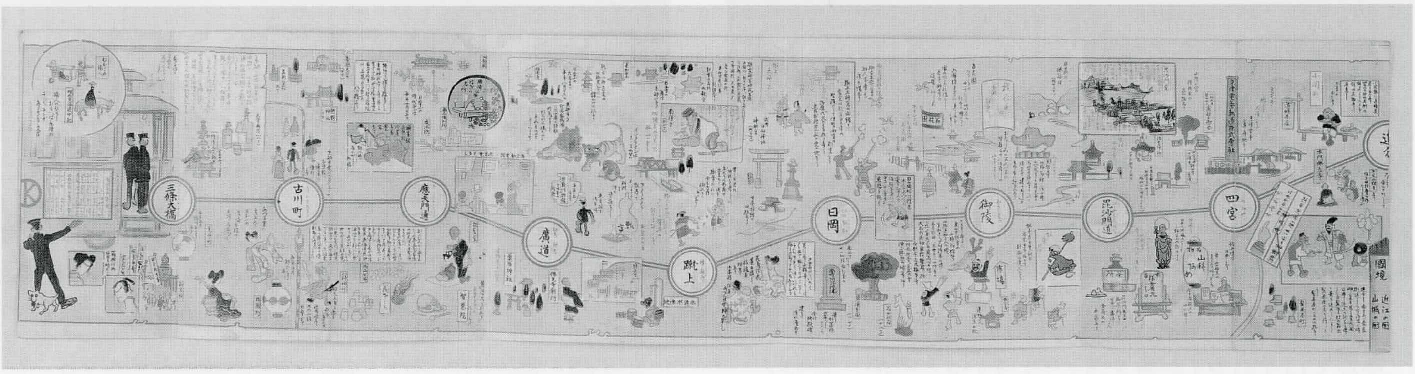
さて、②の器物類には、膳所藩旗印や陣兜、最後の膳所藩主本多康穣の写真、明治初年の当主羽太新司の写真（２点）が含まれています。この羽太新司の写真のうち１点はガラス乾板で、裏面には「明治三午年、本多康穣君ノ御術」と本多康穣による撮影であったとの墨書があります。藩主と羽太家の近しい間柄をうかがうことができます。

（学芸員　高橋大樹）

収蔵品紹介

# 京津(けいしん)電車御案内　吉田初三郎画　大正時代





大正元年（1912）8月15日、現在の京阪電鉄京津線・京都市営地下鉄東西線にあたる、京津電気軌道が京都三条大橋～札ノ辻駅間に開通しました。この資料は開通した頃、沿線駅の周辺にある名所旧跡や風景・産業などを説明文やイラストで紹介した沿線案内です。

大津～京都間には、明治時代に東海道線がすでに開通していましたが、現在のJRのルートとは異なり、山科の南（勧修寺）から伏見あたりまで、大きく迂回していました。このため、江戸時代ににぎわいをみせた旧東海道に沿うように、新たに京津電気軌道が計画・敷設されたわけです。パンフレットには「京津電車の四大特色」として、遊覧場所の豊富さやアクセスの優位性、発車回数の多さなど、競合路線を意識した文言が記されています。

絵について見てみましょう。描いたのは交通関係を中心に、各地の観光鳥瞰図(ちょうかんず)を手がけた吉田初三郎（1884～1955）です。初三郎といえば、鳥瞰図（鳥が空から見下ろしたような構図）が得意なことで知られ、日本全体を無理やりデフォルメして描いた構図が特徴です。彼が鳥瞰図を描いた最初は、大正2年に発行された「京阪電車御案内」だとされますが、この絵が皇太子時代の昭和天皇に、わかりやすいとお褒めいただいたことで、その後も鳥瞰図を中心に描くようになりました。大津では、膳所町、石山町の合併記念に制作された「大津市鳥瞰図（昭和10年）」のほか、坂本や琵琶湖全体を描いたものなどが残されています。

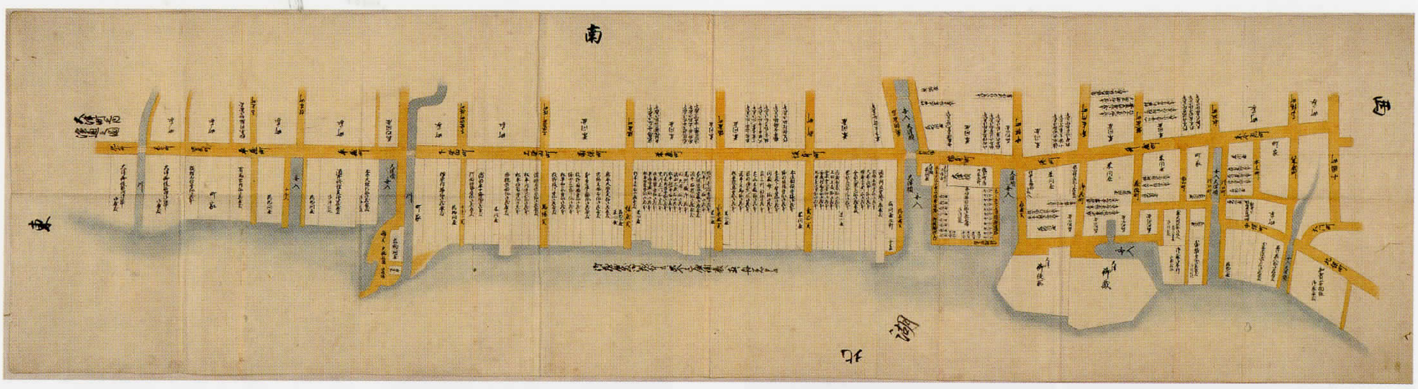
彼は10歳で友禅図案師に丁稚奉公し、25歳のときに洋画家の鹿子木孟郎(かのこぎたけしろう)に師事しますが、師のすすめもあって商業美術の道へと進みます。鳥瞰図ではないこの沿線案内図は、制作時期からも鳥瞰図絵師として画風を模索していた頃に制作したものだと考えられます。当時の漫画のような表現で描かれた沿線案内は、手書きのイラストマップのようで分かりやすく、初三郎の表現力の幅を感じることができるものだといえます。

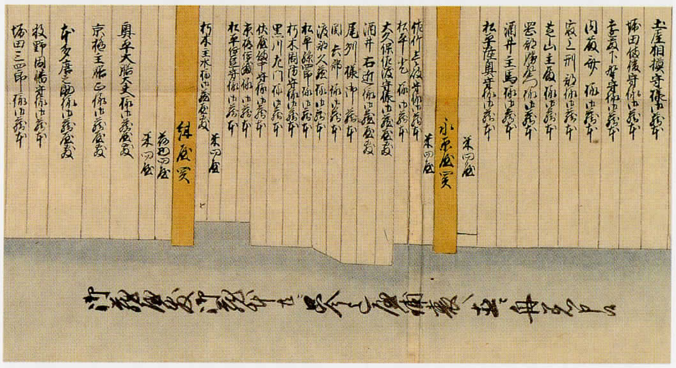
さて、大正14年に京津電気軌道は、京阪電気鉄道と合併し京阪電鉄京津線となりました。実は、今回の新収蔵品にはこの沿線案内とほぼ同じデザインで、合併後昭和3年に制作されたものもご寄贈いただきました。ただしこれには初三郎のサインがないため、他の人物が再構成したものだと思われますが、2つを比較することで、京津線や東海道線の路線の変化や、沿線の移り変わりを知ることができます。2つの絵図は2階常設展示室の近現代コーナーに展示するほか、博物館のホームページでも公開を予定していますので、ぜひじっくり鑑賞してみてください。

（副館長・学芸員　木津勝）

収蔵品紹介

# 大津町之内浜通之図（おおつまちのうちはまどおりのず）　江戸時代





**蔵屋敷部分の拡大**（湖側に「御蔵屋敷御蔵本（元）共、只今迄屋舗裏へ直ニ舟着申候」と、琵琶湖で運ばれた物資が直接蔵に運び込まれていたことを示す一文があります。）

４月に閉幕した企画展「江戸時代の琵琶湖水運」がスタートする３か月前のこと、展示リストも大体でき上がり、展示図録の作成に取り掛かっていたちょうど年末（2019 年 11 ～ 12 月）のことでした。京都の古書店から「浜大津の港付近の江戸時代の絵図が出ました」との連絡を受け、この時、それほど期待せず「拝見します」とお伝えし、持ってきていただきました。

しかし、持参いただいた絵図をみてビックリ。縦 47.1cm、横 181.8cm に及ぶ横長の絵図は、料紙の様子からただちに江戸時代中頃の雰囲気が伝わってきました。これはかなり貴重な絵図では？これが本図との出会いでした。

本図は、左側（東）に二行で書き込まれた「大津町之内浜通之図」が示すとおり、港町として栄えた大津町の「浜通」の江戸時代の様子を詳細に記した絵図です。江戸時代、大津町を支配した大津代官所だけでなく、自領の年貢米収納と換金を目的に設置された大名蔵屋敷の位置情報が網羅されています。これまで、「大津町覚」（国立国会図書館）や『大津市志』（明治 44 年）により、江戸時代中期～幕末期の蔵屋敷について、所在する町名などが知られる程度で、位置までを確認できるものはありませんでした。しかし、この絵図は、感嘆するほど見事に位置を記しています。もちろん、これが当時の状況を正確に記しているのかは詳細な検討を要します。しかし、これまで全く知られていなかった貴重な情報で、江戸時代の大津町の港町としての様子を記す基礎資料の一つだといえます。

ここでもう一つ、この絵図が作成された背景を考えてみます。絵図は無目的に作成されることは稀で、江戸時代であっても、何かしらの証明のため、あるいは訴訟の付図として作成されることはしばしばです。したがって、本図も何か明確な意図があったに違いありません。その意図はいったい何だったのでしょうか？

その謎に迫るために、もう少し本図の作成年代を絞ってみたいと思います。大名蔵屋敷と蔵元（商人から借り受けている蔵）には、大名の官途（かんとめい）名があり、そこから各大名の生没年次を精査してくと、およそ享保４～６年（1719 ～ 21）の状況を描いたものと判断できます。またその前後の大津町支配をみてみると、享保改革の余波を受け、当時の大津代官（小野氏）の罷免（ひめん）後、享保７年（1722）から 50 年間、京都町奉行が大津町政を兼務することになります。本図はその直前に、大津町支配のためだけでなく、年貢米収納と京都への輸送・換金が重要な政策の一つであった大津代官側の参考資料として作成された可能性が高いといえます。

さて、少し説明が長くなってしまいましたが、本図は何とか予算を確保し購入することができ、無事に展覧会で御披露目することができました。本図が、琵琶湖水運と大津町の繁栄を紹介する展覧会直前に現れたことに、不思議な縁を感じます。

（学芸員　高橋大樹）